

日米メールプロジェクト

US-Japan mail project

横浜国立大学 大学教育総合センター

田島祐規子

キーワード: ライティング授業 海外協働プロジェクト

Keywords: writing-class in General education, international cooperative project

Abstract

This article reports on an email-based project carried out in the spring semester of the 2010 academic year between the US and Japan. The participants are eighty-eight freshmen in three English as a Foreign Language writing classes at Yokohama National University and forty-six third-year Japanese learners in two Japanese as a Foreign Language classes at Portland State University in Oregon, the United States. In this project, the Japanese students were asked to exchange e-mails with team members in the US and furthermore to revise Japanese-language essays written by the US members. After the project, a questionnaire was conducted to assess the Japanese students' views on the usefulness of the project. The questionnaire also asked the students to write feedback in English on the project. Responses to the questionnaire indicated a broad range of views on the project, both positive and negative, while the written feedback provided information on the students' (i) integrative motivation, (ii) self-evaluation of English proficiency, and (iii) recognition of the difficulties involved in learning Japanese as a foreign language. The survey results and feedback are expected to enable this e-mail-based project to continue into the future via enhanced opportunities for students to understand English writing as a tool for communication in real contexts.

1. はじめに

米国ミネソタ大学で日本語講師をする友人かから数年前に一本の電子メールが届いた。アメリカ人大学生の日本語チェックをするボランティアの大学生を紹介してほしいという依頼だった。数日後、大学周辺地域で現地日本人ボランティアがすべて確保できたということで学生を紹介することはなかった。しかし、2010年度前期にライティング授業で行うプロジェクトの考案中に、その時の依頼内容が本プロジェクト計画へと結びついた。早速プ

日米メールプロジェクト 田島祐規子

プロジェクトの具体計画を立案して、米国オレゴン州ポートランド州立大学外国語学部日本語学科の教授に参加協力の打診を行った。その結果、メールプロジェクトが実施可能となった。プロジェクト参加者は、主として上記米国大学の日本語クラス 3 年生 46 名と横浜国立大学 1 年生 88 名である。

この実践報告書は、日米の大学生によるメール交換および日本語作文添削の取り組みを課題とした日米プロジェクトの結果報告を行うものである。

2. ポートランド州立大学について

オレゴン州ポートランド市は米国西海岸にあり、シアトルとサンフランシスコのちょうど中間点に位置する米国主要都市の 1 つである。そのポートランド市を拠点とするポートランド州立大学は同州では唯一主要都市部に位置する大学として有名で、米国大学情報専門紙 Princeton Review 紙は"Best in the West" という格付けをしている。大学応用言語学部と直結する英語クラス(ESL)があるため、語学留学生を多く受け入れている。日本の大学との交流も活発で、北海道大学や早稲田大学とは相互の交換留学制度を設けている。East Asia Center や Japanese Center のような教育機関においてアジア研究が盛んに行われている一方、外国語学部における日本語教育は米国西海岸においてトップランクに位置している。尚、これ以降 ポートランド州立大学を PSU, 横浜国立大学を YNU とする。

3. プロジェクト計画

プロジェクトは PSU と YNU 双方の学生にとって有意義なプロジェクトであることは当然として、YNU 側からの協力依頼である以上、PSU の学生にとってもより有益なものなくてはならない。そのため、単なる交流目的のメール交換に終わらせるのではなく明確な課題を課すプロジェクトにしたいと考えた。そこで、PSU の日本語クラス必修課題である「sakubun (作文)」の添削をプロジェクトに組み入れることにした。PSU 日本語クラスの「sakubun (作文)」は、800-1200 文字の日本語作文の課題であり、内容・言語量においてライティング授業での英文エッセー課題に相当すると判断した。学期中後半に英文エッセーライティングに取り組む YNU 生にとっては良い刺激になると考えた。一方、PSU の学生にとっては、「日本語母語話者である日本人大学生」による添削は、日本語の実力を試す絶好の機会になると同時に、より完成度の高い課題を仕上げる手助けになる。この双方の利点を考慮しつつ両大学の学生が取り組む課題を具体的に表 1 のようにまとめて参加協力の依頼を行った。尚、YNU 生についてはプロジェクト終了後のまとめとして、表 1 右欄の課題 1) から 3) と、後述 6 にあるアンケート回答をすべて揃えて提出することを課して、この課題提出を全体成績評価の 15% に組み入れることにした。

表 1 : プロジェクト課題

米国 PSU 側の課題	日本 YNU 側の課題
1)挨拶と自己紹介文(日本語 E-mail)	1)挨拶と自己紹介文(英語 E-mail)
2)添削を受ける課題 (日本語作文) 送信	2)日本語作文添削とコメント (英語) 返信
3)添削への御礼メール(日本語 E-mail)	3)返礼メール(E-mail 英語)

4. 実施計画と学生割り当て

プロジェクト開始にあたり、1)学期中の授業日程の違い 2)両大学での参加学生数の差が問題となった。そのため、米国側の担当教授と連絡を取り合い最終の実施計画案を作成し、学生のチーム編成を実行した。

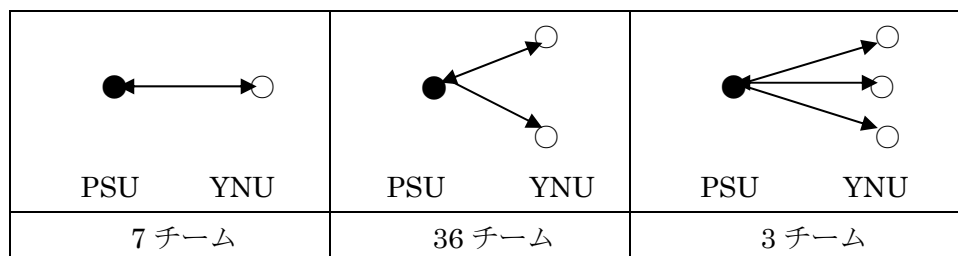
4.1. 実施計画について

プロジェクト開始は4月下旬となった。この時点において、PSU はすでに quarter 制(4 学期制)の半ばにあり、一方 YNU は semester 制(2 学期制)の開始直後であった。そこで、双方の授業シラバスを比較検討し、原案に数回修正を加えた後に最終の実施計画案を作成した。(資料 1)

4.2. チーム編成(matching)

PSU の学生数に対し YNU には約 2 倍の学生が在籍していた。さらに 1 つのクラスに 10 人の再履修学生が遅れて追加された。そのため、予想外にチーム編成 (matching) に時間がかかってしまった。そのため、YNU の履修登録者が完全に確定する第 4 週目がプロジェクト開始の週となった。チーム編成 (matching) は、授業内で「くじ引き」で決めたところ、予想外に面白いイベントとなった。チームによっては、交換相手となる PSU 学生の性別が英語名からでは判別できない場合もあり、最初の自己紹介メールを非常に楽しみにする学生もいた。すべてのチーム編成 (matching) の結果、参加者 88 名、総計 46 チームが取り組むプロジェクトとなった。(図 1)

図 1 : チーム編成 (matching)



5. 日本語クラスの課題作文について

プロジェクトの課題の1つは日本語課題作文の添削である。PSUの「sakubun(作文)」は、通常、明確な規定に基づいて、日本式原稿用紙に鉛筆で書いて提出する課題となっている。また、その課題の添削および内容評価をするのは日本語の指導教育を受けた正規の日本語教師である。しかし、このプロジェクトでは、母語話者というだけで特に日本語の教育指導の訓練を受けたことのないYNU生が作文添削をする。以上の2点について、プロジェクトでは以下のような方法を取り指導を行った。

5.1. 「sakubun(作文)」の受け渡し方法

日米双方の学生には、教室や自宅で手書きの作文課題を自由自在にPDFに加工・添付・印刷できる環境は必ずしも保証されていない。そのため、このプロジェクトにおいては、PSU側からの了承のもと、「sakubun(作文)」はすべてWord文書に仕上げた電子文書としてメールに添付して受け渡すことにした。

表2：課題の受け渡し方法

PSU 課題文書の送り方	課題添削の依頼をメール本体に日本語で書き、Wordで作成した課題作文を添付にして送付
YNU 添削文書の返送方法	添削後の感想をメール本体に英文で書き、添削を加えた課題作文を添付にして返送

5.2. 課題添削の方法について

YNU生の添削の出来・不出来は、後の課題の完成度に影響することになる。そのため、添削の方向性を明確にしたいと考えた。まず、下記のPSUの作文評価基準の「規定」と「評価項目」のうち、原稿用紙使用に関する規定および評価項目の1) 4)を添削対象からは外した。次に、母語話者が母語の文法や用法について正しい知識を持っているとは限らない。そのため、評価項目の2)「文構造・語彙選択の適格さ」については母語話者としての直観を重視し、3)「課題テーマに対しての内容充実度」については読み手の視点から書き手の創造性を楽しむことに焦点を置くようにと学生に指示をした。また、YNU生にはPSU日本語クラスで実際に配布されるプロジェクト説明資料(英文)を提示して、課題添削に責任をもって取り組むように指導した。

表3：作文評価項目（英語部分は原文説明資料からの抜粋）

規定	Use "genko-yoshi" and write sentence vertically without leaving a line between each line. The length should be 2-3 pages or 800-1200 letters.
評価項目	1) Mechanics' & penmanship ←書法、筆跡
	2) Structure (grammar & vocabulary) ←文構造・語彙選択の適格さ（日本語話者としての直感重視）
	3) Content (creativity, originality, organization) ←課題に対する内容充実度（書き手の創造性を楽しむ）
	4) convention (indentation, use of genkooyoshi, etc. ←規定の原稿用紙への書き方

6. 実施後の学生のアンケート

プロジェクト終了後に YNU 学生にアンケートを実施した。欠席者が 2 名あったので、回答者は 86 名であった。アンケートの内容は、1)プロジェクト全体に対する 5 段階評価 2)プロジェクトへの英文感想の 2 種類とした。回収率を高めるために回答自体を英語で記述する提出課題とした。(資料 4)

6.1. プロジェクトに対する 5 段階評価

全体の評価についてはプロジェクトが英語学習に役に立ったかどうかを 5 段階評価で問う質問のみとした。回答結果として、プロジェクトに対する肯定的評価（「a lot (大いに)」と「very much (非常に)」)は参加者の約 7 割(67.4%)となった。一方、それ以外の否定的な回答は、約 3 割(32.6%)となった。しかし、後者の英文記述回答を読むと下の例にあるように、ほとんどの場合自分自身の英語産出力への反省や、作文課題のやり取りが成功しなかったことを否定的理由として記述していた。そのためプロジェクトへの全体評価はほぼ肯定的なものであると判断できる。(学生の英文記述は原文のまま)

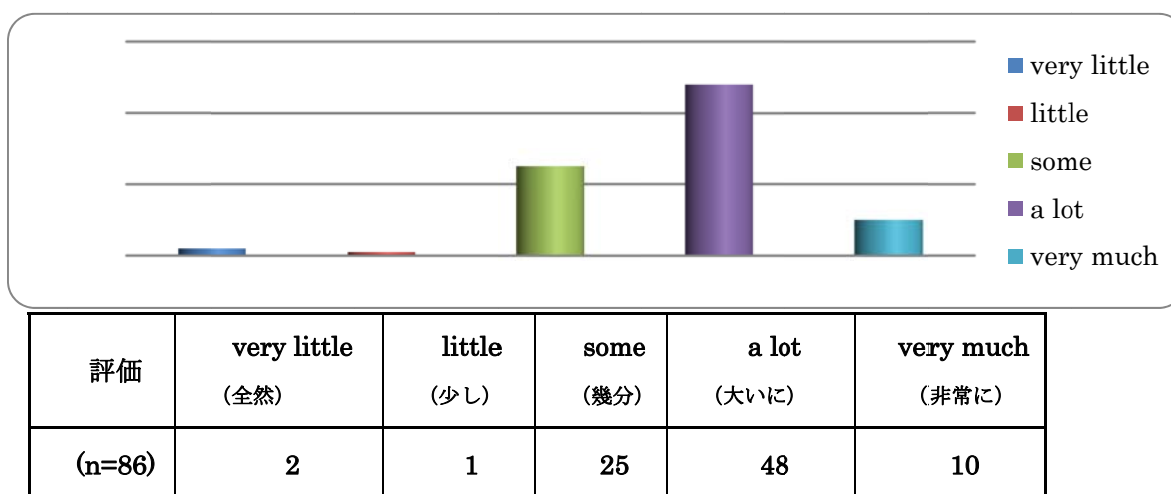
Student A (some の評価者)

My English is simple and not interesting. I must (want to) study English more.

Student B (very little の評価者)

I thought this project is very good for me. Because I have been interested in international interchange. But I couldn't accept the assignment. So, I can't find good points and not-good points. I was disappointed not to accept that. I learned international interchange is not sometimes easy.

図2：プロジェクトに対する評価 (問) プロジェクトは役に立ったか？



6.2. プロジェクトに対する英文感想

英文感想の中で重要と思われる箇所にカラーペンでマークをつけ、次に5段階評価のグループ別にそのコメントを整理した。感想には、学習言語の文化や母語話者に関心を示す「統合的動機付け」(Gardner & Lambert, 1972)に関するものや、適格に表現できない自分の英語力を客観的に分析評価している記述が非常に多く見られた。マークした回答記述を大まかに次の4つにまとめ、回答者数を表4としてまとめた。(学生の感想は原文のまま)

表4：記述回答のまとめ (注：一人の学生が複数の感想を記述している場合もある)

N (=人数)	2	1	25	48	10	85
評価別 Group	very little	little	some	a lot	very much	合計
(1)統合的動機	2	2	20	48	10	82
(2)英語力自己評価	2	2	19	55	7	85
(3)日本語に対する意識	0	0	5	17	4	26
(4)その他	0	0	3	1	2	6

(1)統合的動機付けへの認識 (=学習言語母語話者と直接かかわることへの関心)

Student C: I was happy to make myself understood in English.

Student D: I felt the pleasure of communicating with foreigners.

Student E: I was able to learn the happiness of touching to the different culture

(2)自分の英語力に対する自己評価 (英語による産出力不足への反省)

Student F: My English is full of easy sentences and easy grammar.

Student G: My ability to express myself in English is poor.

Student H: I would like to strengthen my vocabulary.

(3)日本語母語話者としての自覚

Student I: When I correct Japanese sentence, I wonder if we could speak Japanese properly.

Student J: I thank this E-mail project for giving a good chance to reconsider our way to speak

(4)その他

①プロジェクトへの改善提案

Student K: I wanted to have my English composition corrected.

Student L: I wish I had exchanged more e-mails.

②日本語学習者から得た英語学習への刺激など

Student M: I am surprised my partner's Japanese is perfect.

Student N: I understand that the PSU students also were studying foreign language harder than us. It encourages me very much.

7. 反省点

プロジェクトにおいて反省点がいくつかある。まず、作文課題のやり取りが成功しなかったチームがあった。その一因は、日米の学期の「ズレ」にあった。プロジェクト最終段階の5月末は米国では夏学期直前時期であり、一部の PSU 生が夏期授業スケジュールにすでに入ってしまうために最後までプロジェクト取り組むことが有耶無耶になってしまった。次に、コンピュータ上でのやり取りに問題があった。両大学ともにキャンパス内のパソコンを使用すれば問題なくメール交換ができたものの、学生個人の PC でやり取りの場合にいくつかの不具合が生じた。これにより、日程計画通りに進まないチームがあった。また、当初の計画案ではお互いが学習言語でメール書くことを目標にしていたが、これが途中からすべて英文メールとなってしまった。しかし、双方が異なる学習言語でメールのやり取りをすることは不自然であり、最終的にすべて英文メールに落ち着いたのはむしろ当然のことだったと反省する。また、PSU の学生からもプロジェクトに対する感想も聞くべきだったが、短期間における立案・実施であったため準備が間に合わなかった。

8. 最後に

経済のグローバル化やインターネットの普及により「書き言葉によるコミュニケーションの需要は顕著」(Matsuda, 2010)で、この結果、日本の英語教育においても文章レベルのライティングの重要性が高まってきている。また、このような傾向から「ライティングそのものを学習することから、ライティングを活用して学習すること」に流れが変わりつ

つある(Weigle,2002)との指摘も多く聞かれる。本プロジェクトに対する感想において、多くの学生が英語母語話者とメール交換することへの強い興味関心と、同時に英語で的確に自分の考えを発信(output)する難しさを指摘している。英語をコミュニケーションのために実用したがゆえに表出した興味深い感想である。今後は、複数の反省点を改善点に変え、このプロジェクトの継続に取り組んでいきたいと希望している。また、このようなプロジェクトで得た学習経験が学生自身のライティング学習にどのような影響をあたえるのかを今後の研究課題の一つとしていきたいと考える。

最後にポートランド州立大学・外国語学部・日本語学科の渡辺教授に心から感謝したい。渡辺教授とはプロジェクト実施中に100通を超えるメールのやり取りをする結果となった。米国では学年度末の多忙な時期にあったにも関わらず、惜しみなく時間を割いてくれたことに心から感謝したい。渡辺教授の一貫した理解と協力なしには、このプロジェクトは実現しなかったと思われる。

参考文献：

Gardner, R. & Lambert, W. (1972). *Attitudes and motivation in second-language learning*: Rowley, MA: Newbury House.

Matsuda, P. K. (2010). English writing in Japan: Toward integration. *JACET Journal*, 50, 15-20.

Weigle, S. C. (2002). *Assessing Writing*. Cambridge: Cambridge University Press.

日米 E-mail プロジェクト： 日本とアメリカ

プロジェクトの流れ

PSU (Portland State University) & YNU(Yokohama National University)

PSU 時間		YNU 時間	
4/17 (土) 23:59p.m.まで	PSU 担当教員がメールアドレスのついた参加者リストをYNU田島にメールで送る	4/18(日) 16:59p.m.まで	YNU田島教員が参加者リストを受け取り、PSU学生に対してYNU学生1ペア・グループ作文添削担当の割り振り計画を作る
		4/22~4/28 授業にて	YNU学生は担当のPSU学生に、英語による挨拶メールを送る。それぞれ以下の授業日の23:59までに送信を完了する 4/22 (木曜グループ) 4/27 (火曜グループ) 4/28(水曜グループ)
4/27 (火) 23:59p.m.まで	PSU学生にYNU学生からメールが届く		
5/4 (火) 23:59p.m.まで	PSU学生が自分担当のYNU学生に直接以下の内容のものを送る [内容] ・日本語による挨拶と簡単な自己紹介(日本語) メール本体に書く ・クラスの課題(作文)を添付する。		
		5/5(水) 16:59p.m.まで	PSU学生からYNU学生に課題(作文)が添付されたメールが届く。
		5/6~5/12	YNU学生は課題の添削作業を開始する。 5/6 (木クラス) 5/11(火クラス) 5/12 (水クラス)
		5/14(金) 深夜 23:59 まで	YNU学生は自分担当のPSU学生に以下の内容のものを送る [内容] ・挨拶メールと本体に課題作文の感想(英語) ・加除修正したクラスの課題(作文)の添付
5/14(金) 6:59a.m.まで	左記の時間までに加除修正のついたメールが届く		
5/16(日) 深夜 23:59 まで	・YNUの添削担当学生にお礼のメールを送る (日本語)	5/17(月) 16:59p.m. まで	お礼メールが届く
			YNU学生は以下の日時までに返礼メールを送る 5/18(火クラス) 5/19 (水クラス) 5/20 (木クラス)
E-mail project は、ここまでとする。これ以降について、もっとメールでやり取りしたい場合には各学生が自主的に行う。			